

二行アケ

相州伊豆山あたりの、学生が試験勉強な
どに行く温泉宿の一室である。正面奥は中
がラスの四枚障子で、そこを開けると濡れ
手拭ひが二三本日に干してある欄干があり、
晴れ渡った冬の海が見える。上手側面の前
方は床の間、後方は押し入れ。下手は廊下
へ通ふ襖になつてゐる。
床の間には正月の心持ちで輪飾りや餅が

供へてあるが、直ぐその傍に書籍やノート
が~~乱~~乱雑に散らかつてゐる。障子と押し入
れの隅のところに鏡台と衣桁があり、そこ
ら一面に女の化粧道具だの、着換への衣裳
長襦袢だのが、一見甚だなまめかしくなら
しなく、放つたらかしてあつたり引つ懸け
てあつたりする。部屋の中央にチヤブ台、
やや上手に火鉢。チヤブ台の上だの下だの
には五六本の燭徳利や数の子の井があつて
杯盤狼藉たる有様、火鉢の傍にもたつた今

4

6号

まで其を打つてみたらしく、其盤と碁石が
ふしだらな形で投げ捨ててある。
室内には煙草の煙が朦々と暮れこもつて
ゐる。向つて右に藤沼、左に野田がチヤブ
台を挟んで、まさに腕角力を闘はしてゐる
最中である。山口は二人のまん中に控あつ
て、片手に敷島片手に杆を持ちながら勝負
を見物してゐるが、その顔には鼻柱へべつ
たり、墨を塗られてゐる。三人とも宿屋の浴
衣にどてらを着て、以下幕がありてから始

6号

終ちがちびと酒を飲み~~数~~数の子の井を突ツ
つく。光子は火鉢の傍に、お燭の番をしな
から硯の墨をすつてゐる。大学生のつれあ
ひにしては少し贅澤な対の大嶋~~細~~細を着た
二十前後の、~~世~~當世向きのハイカラな美人
で、此の部屋の空気とは不釣合にキチンと
髪かたちを整へてゐる。そしていかにも惺
巧さうな、悠然たる物の云ひふりをする。

二行
ア
4

6

(藤沼) (一生懸命に力みなから) う、………う、………

………
(野田) (同じく踏んぱりながら) う、………う、………

………
(山口) やあ、いゝ勝負だ、なかなか勝~~た~~敗^けがき

もうんな、

(藤沼) ~~何糞ッ、~~ もう少しだ、………

(山口) おい野田、しツかりやれしツかりー、

負けちゃあいかんぞ。奥さん、墨をいっさ

り擦^{すり}つといて下さい。あなたの亭主に着けて

7

やるんだから、

(光子) ええ、よござんすわ、もうどつさり擦
れてゐますわ、——(藤沼) あなた、負けちゃ

~~あ~~あ駄目よ、

(山口) 怪しからんねどうも、味方をしちやあ、

……あ、畜生畜生！おい野田、どうした
んだ！しツかりやれワたらー、

(野田) (負けさうになる) うう、……う、……

こ、こいつあいかん、……

(山口) 馬鹿々々、もう一つふんばるんだ！

8

6号

(野田)	う、……う、……
(藤沼)	う、……う、……
(光子)	どうして？、まだ勝負がつかないの？、
(山口)	まだまだ、またなかなか！
去つてゐるとたんに野田がとうとう捻ぢ	
伏せられる。	
(藤沼)	さあ、どうだ、おいおい、墨を持って
来い、	
(野田)	待つてくれ、もう一遍だ！
(藤沼)	いいや、いかん、ずるいぞ貴様は！

9

(野田) いや、こころに酒がこぼれてみ
たもんだから、そいつが肘に喰ッ着いてつる
つる滑っちま~~つ~~つたんだ、
(山口) ぢや、もう一遍やり直しー、
(藤沼) いかん いかん！
(山口) だけど今日は非常に長くかかったから
な、ほんとにやつたら或は野田が勝つたかも
知れんよ、
(~~野田~~) さうよ、今日は怪我負けよ、まあ来い
もう一度、……

別
行

10 6

(藤沼) いいやいかん、墨だ墨だ、墨を塗って

からもう一度だ、

(野田) よしー ぢや ~~~~~~~~~

塗って貰はう、その代りきつともう一度だぞ

(藤田) うん、いいとも、何度でも来い、

(野田) (顔をつきあしなから) 奥さん、さあど

うぞ、 ~~~~~~~~~ 塗って下さい、

光子、黙ってニヤニヤ笑ひながら、どつ

ぷりとつけた筆を持って野田の前へやって

来る、

1.1

(野田) さあどうぞ、早く~~来~~して世見たいです
な、

(光子) まあ、~~~~~~~~~

~~~~~~~~~ たって駄目だわ、~~~~さあ、何處にしませ  
うかしら？、

(野田) 何處でも結構です、~~~~~~~~~

~~~~~~~~~ どうか御遠慮なく、——

(藤沼) □の周りに八字髷を畫いてやれよ、

(光子) だって野田さんはこんなに髷が生えて

12

みるんですもの、墨がうまく着きやあしない
わ、

(藤沼) うん、いいことがある、額にシの字を

書いてやるんだ、

(山口) おつと、そりやあいかんよ、一と筆と

ふふ約束だよ、

(野田) (まだ顔をつき出したまま) 大分相談が

纏まらんやうだね、好い加減にきめてくれろ

よ、――

~~~~~~~~~



13

6号

(藤沼)

それぢや山口とおんなじかい、鼻の

まん中へぬーツと一本……

その言葉が終らぬうちに、光子がいきな

り眉間から鼻の頭へかけてどぶどぶと塗り

始める。

(野田)

塗られながら鼻の孔をもぐもぐやらせ

る)

ああ撥ったい、……

(光子)

ちよいと、お動きになつちやいけな

わ、もうアしですから、

(野田)

……畜生、覚えてろ、今すぐ敵を取

敵



14

165

つてやるから、………

ふひなから

是に

塗られてしまふ。

(藤沼)

あつははは、

こいつあいいや、おい野

田、

~~あつははは~~

却つて貴様ア好い男になつ

たぜ、

少くとも鼻筋が通つて

見え

るぜ、

(山口)

~~あつははは~~

團子ツ鼻が分らなくなつ

ちやうたかうな、

(野田)

(山口に)

何だい貴様は、どつちに味

方してるんかい、

怪しからん奴だ、

~~あつははは~~



15

別行

(光子) (済まし込んで火鉢の傍へ戻つて来なが  
ら) 野田さん、ちよいと鏡を御覧にならない  
や、

(野田) え、なかに、鏡なんかいりませんよ、  
……さあ、今度こそ復讐戦だ、

(光子) でもまあ、ちよいと御覧になつたら、  
(野田) ~~腕を~~ 腕を出して藤沼を促す) さあ、

(藤沼) まあ待てよ、折角だから一つ鏡を見て  
見ろよ、



16 / 6号

(野田)

いらなにと云つたらうるさい奴だな、

さあー、そんなことを云つてごまかしたつて  
承知しないぞ、

(山口)

よし、今度は我が輩が公平なるアンパ

イアになつてやる、

さあやれ、

(藤沼)

ぢやあもう一度ひねってやるかな、――

――光子、奴奴の面へ今度塗るところを考へて  
おけよ、

(光子)

ええ、もうちやんと考へてあるわ、

両人手を組み合はせて気合ひを入れる。



17

(山口) さあ、いいか、一イ、ニイ、……あ、待つ

た待った！ちよつと奥さん、何か拭く物を貸してくれませんか、

(光子) はあ、(袂からハンケチを出して)此れで

~~拭~~いかか、

(山口) ええ、結構々々、(ハンケチを受け取つ

て)ヤブ台の酒を拭きながら) どうもね、此

の物言ひの纏を陰いて置かんといけ(ません)から

ね、……さあ此れでよしと！いいかね、一イ、

ニイ、三！

一イ、



18

16号

兩人また前のやうに力み返つて勝負を争ふ、孰方もちやうど互角くらゐな形勢に見える。

(山口) ははあ、今度は大分野田の方が旗色がいいぞ、そう、もう一息………

~~雲~~

そこだ、

するいわ、

(光子) 山にさん、あなた公平なるアンハイアだつて仰つしやつたぢやないの、

(山口) ええ、そりや審判は公平

~~雲~~

ですよ、

だけれど藤沼にはあなたと云ふ味方があるんだ



19

から、僕が野田の方に附いてやらないぢや、  
却つて公平を缺くことになりまかなす……あ、  
野田、又いかんぞ、しツかりやれしツかり、  
……うん、さうだ、それでもう一と息だ、……  
……奥さん、墨はいいですかね墨は……いよいよ  
よ御亭主の敗北ですぜ、……あれあれ、ど  
うしたんだ、……  
(光子) あなた、負けちやあ駄目よ、  
(野田) 何善美ツ、……  
(山口) うん、よしよし、大丈夫、……



光子  
だ  
つて、  
ほん  
と  
う  
に  
同おんなじくら  
みだ  
わ

負けをなすつたのよ、  
 やつはり先さつきのは野田さんが怪我



(光子) ちや、もうあと三十秒よ、それで勝負  
 がつかなかつたら引き分けよ、

鏡台の上に載つてゐる女持ちの金時計を  
 持つて来て、それを現つめる、

(山口) 女の味方がついてゐるとどうもいかん

なあ、そんなに亭主を庇<sup>かば</sup>ひたいもんか、なあ、

(光子) 底<sup>ち</sup>子<sup>つと</sup>譯<sup>ち</sup>ぢやあない、~~き~~けれど、………云ひ

なかう時計<sup>ちつと</sup>を現てゐる)………もう引き分けが

当り前だわ、………(短き間) さあ、三十秒よ、

勝負なし、………さ、山口さん、(母親が子供を



22

6号

たしなめるやうな、生意気な口調で) 勝負な  
しよ、

(山口) (残念さうに)

ふむ、

~~やつ~~やつ

は<sup>0</sup>り無しか、

ふふと同時に、

野田と藤沼は

~~ぼつと~~ぼつと

たやうに手を放す。

(藤沼)

あ、兎に角これで敵討ちにはならなか

つたぜ、

(野田)

その代りさつきのは怪我負けた

ることを認め<sup>る</sup>だらう、

(藤沼)

馬鹿を云へ、あれは貴様か立腹に負け



たんだ、

(野田)

そりやあいかん、

あれは怪我負けだか

ら己はちよいと此の墨を拭いて来る、(立ち上

らうとする)

(藤田)

(野田を押さへつけながら)

ずるいがる

い！ そんな奴があるもんか、

(野田)

どうだい？ 公平なるアソビの意

見はせ、

(山口)

うん、まあ何だな、或は怪我負けかも

知れんかい、折角着けたものだから拭くのも惜



24 6号

しいな、それに己だけぢやあ淋しいからな、

(野田) 馬鹿野郎、だから貴様は二股武士だ

つて云ふんだ、

(藤原) あつははは、まあさう云はずに一杯飲

めよ、

(光子) あ、さうさう、お燭が~~き~~つ~~き~~過ぎしま

つたわ、

鉄瓶の中から鉋子を出してチヤブ台の~~上~~上

へ持つて来る、そしてそのまま又火鉢の方

へ立つて行かうとする。



25

6号

(藤沼) (光子を呼び止める) おい、まあ此處で  
お酌をしろよ、

光子、不承不承に藤沼の傍へすわって  
子を取り上げる。

(光子) (野田に) 一ついかが？

(野田) (酌をして貰ひながら) ああ、ひい目  
に遇はせやかつたな、鼻の頭がひりひりする  
ぞ、よつぽど此りやあ濃い墨だな、

(光子) ~~~~~~~~~ (つんとした笑ひ

~~方を~~ ~~する~~ どうもお気の毒さま、



26 別行

(山口) 奥さんのお酌ちやあ僕も一杯ついで貰  
ふかな、

(光子) あら、どうも訳さ、

(山口) だって珍しいぢやありませんか、あな

たかお酌するな、んて、

(光子) さうですか知ら、………(山口)に酌をしな

から、だけれどわたし、お酒飲みが嫌ひなん

ですの。だからいつでもおッ放り出して、勝

手にお飲みなさいッて云ふ風になるんですの。

(山口) ぢやあ何ですか、御亭主だけは特別で

酒飲みは嫌ひでも



27

すか、

(光子)

いいえ、藤沼だつて酔つ拂ふときは大

嫌ひよ、

(野田)

ふん、怪しいもんたぜ、どうだか藤沼

？、

(藤沼)

どうだか知らんね、そんな事は答辯の

限りにあらずさ、

(光子)

ほんとうに少うしお止りになつたらど

う？、

試験勉強に来るなんて云つて、毎日々

々お酒ばかり飲んでゐて、



(野田)

まあいいでせう、正月だから。

(光子)

だってもう暮れのうちからよ、——そ

れにあなた方が三人ここに集まつちやったの

かいけないのよ、藤沼も相手がないとそんな

に飲みはしないんですけれど。

(山口)

へえ、へえ、お邪魔ならわれわれは退

却しますよ、

(光子)

あら、何もさう云ふ意味ぢやないのよ、

あなた方だつてお互ひにさうなさる方が勉強

かお出来になるぢやないの。藤沼は去年も試



駿にしくじつて ~~あんなに~~ 若しも今年 ~~落第~~ 落第す

ればあなた方のせみだわ。

(藤沼) (顔をしかめる) よせやい！ 試験の詮

なんか、

(光子) だってさうだわ、為めを思つてさう云

ふんだわ、

(山口) 亭主の怠け者に愛憎をつかしましたか

ね？

(光子)

~~そりやあ~~

愛憎

~~もつかします~~

わ、——それに藤沼の國の方ぢや、両親や何



30

6号

かかまるで私が落第でもさしたやうにふん  
でせう、だもんだから猶更……

(藤沼)

よせやい！、よせつたらそんな話ば！

さあ、一つお酌をしろ、

光子、ニヤニヤしながら酌をしてやる、

(野田)

あッははは、いや全くだ、斯う飲み助

加期せおして一つ宿屋に落ち合ったのが悪

いんだね、我が輩なんが憲法のノートをやつ

と半分讀んだきりだよ、

(山口)

でもまだいいや、已なんか昨日始めて



三ページ(読んだだけだよ。湯に這入つ

ちやあ酒を飲み、湯に這入つちやあ酒を飲み  
でね、

(野田) 一つ奥さんの忠告に従つてみんな散り  
散りばらばらになるかな、己は熱海にでも行

かうよ、

(山口) ところが君、逆に熱海から来る奴があ

るんだぜ、

(野田) 誰か？、

(山口) 君は濱村を知つて(る)だらう、



みたらし

(野田)

ふん、濱村か、いやな奴だぜ、

(山口)

今朝海岸へ散歩に行ったら、彼奴が素

敵な別嬪をつれて歩いてるんだよ、そいつが

ほら、東洋劇場の三浦春代なのさ、

(藤沼)

全体何處に泊ってるんだい、

(山口)

~~宿屋はハツキリ教へ~~

なかつたが、~~二人で~~ <sup>みたらし</sup>熱海へ来て

~~んだ~~ <sup>みたらし</sup>だよ。だけど熱海も飽きて来たから、事

に依ったら伊豆山へ引つ越すつもりで、様子

を見ながら今日午<sup>ひる</sup>過ぎに遊びに来るツて云つ



てたつけ。

(野田) (ちよつと嬉しさうに) ぢや、春代もつ  
れて来るだらうか、

(山口) うん、来るだらうよ、

(光子) ああ、あの濱村さん、——わたしあの  
方は大嫌ひよ、

(山口) 誰でもありやあ嫌ひですよ、不愉快な

奴でね、いやに色男ぶりやあがつて、

~~し~~ <sup>の気障な奴が</sup> ~~かし~~ <sup>い</sup>ろんな女を引っかけ

るん ~~だ~~ さうぢやないか、三浦春代を物にす

藤沼

33



34.

るなんか怪しからんよ、

(野田)

君はそんなことを云ふ権利はない

さ、

此の上アテられちやあ己たちが溜らんよ、

(山口)

己もよつぽい、来てくれないても結構

だって云つてやらうかと思つたんだかね、し

かしちよつと春代の顔が見られるのは悪くな

いからな、

(藤沼)

あははは、考へたな貴様、

(野田)

あははは、そこは山口だから如才はな

いさ、己もちよつと春代は見たいな、



(光子) まあ、あなた方は人の物を御覧になつてどうなさるの？、男はみんなそれだから厭だわ、

(野田) 別にどうするつて気はなくつても、美人を見れば悪い気持ちはしないでせう。失禮ながら

~~あれこれ~~ 我れ我れが此の部屋へ集まるのも、要するに奥さんが美人だからさ。ばかり

(光子) ~~あれこれ~~ 大いに光栄の至りなのね、その代り春代さんが来ると今度はみんな其方へおまけになるんでせう。



(山口) なあに、春代とあなたを一緒にしとい  
て跳めますよ、

(光子) どういたしまして。私なんか春代さん  
の傍へも寄りつけやしませんわ、

(山口) だけど濱村 <sup>お</sup> さう云つてましたぜ、春  
代に聞えないやうに <sup>お</sup> 内証で僕に耳打ちをして  
ね、

(光子) へえ、何ですって、

(山口) 藤沼の <sup>細</sup> 君を是非紹介してくれろって、  
(光子) まあ、失禮なん、—— 楽劇座にゐる



時分に始終あの人とは私たちの樂屋へ来たけれど、一遍だつて挨拶なんかしてやつたことはなかつたわ。その時分から春代さんとおかしかつたのよ、

(野田) いや、あの野郎はそんなことを云ひかねない奴だよ、

来やかかつたら喧嘩を吹ツかけ

て打んなくつてやるか ~~な~~

(~~光~~子) でも春代さんに恨まれるわよ、

(山口) 恨まれたつてよござんすよ、どうせ惚

れられツことはないんだから、



(藤沼) あんな奴はうんといぢめてやる方がい

いんだ、何か痛快な事はないかな、

(山口) 腕角力をして墨でも塗るかね、

(野田) そいつもいいが、墨だけぢやあ面白く

ないな、~~い~~ ~~く~~ ~~ら~~ ~~試~~ ~~い~~ ~~て~~ ~~も~~ ~~落~~ ~~ち~~ ~~な~~ ~~い~~ ~~や~~ ~~う~~ ~~な~~ ~~物~~ ~~は~~

ないかな、  
い

(光子) あるわ、それなら私のところに、(藤沼)

に、ねえ、あなた、あれはどうぞ、あ、たしが

使つてゐるグリーンの<sup>その</sup>漆粉はぞ、

(藤沼) (藤沼をたたいて) うん、あれあれ！



(野田)

へえ、そんないい物があるのか、

光子、押し入れをあけて、皿に溶いてある染料を持って来る。

(光子)

ほら、此れよ、——このごろ退屈だも

んだから染め物でもしようと思つて、ちやうど此れを溶いたところなの、

(野田)

そいつはなかなか剥げませんかね、

(光子)

ええ、いくらシヤボンで擦ったつて一

週間ぐらゐは剥げなんですよ。あたし此の間  
うっかり指の先へつけてしまつて、ほんとに



往生しちまひましたわ。

(野田)

~~~~~~~~~

そいつあ

素敵

だ、そいつをど

つぷり塗

てやるんだ、

(山口)

奥さんも此れで人が悪いなあ、

(光子)

(すましんで)

あたしの物だなんて云

つちやあいやだわ、

~~~~~~~~~

インキを皿へあけ

換へたつもりにすればいいわよ、

(藤田)

さうして塗つてしまつてから、インキ

と漆粉と間違へたつて云つてやるんだね、



(野田)

春代の奴かさぞ泣くだらうなあ、

(山口)

おいおい、此方があべこべに負けちま

つたらどうするんだい、

(野田)

あんなひよろひよろした男に負ける奴

かあるもんか、

(山口)

少くとも己は御免だぜ、己は一番弱い

んだからな、

(藤沼)

あッははは、

(山口)

あの男だつて始終テニスをやつてゐる

から、

相當に体格はいいかも知れんぜ、――



42

6号

まあ何だな、最初に普通の墨でもつてちよいと瀨臨みをして見るんだな、

(光子) さうなすつた方がいいわ、野田さんが勝てばきつと藤沼も勝てますから、

(野田) うん、よしよし、ぢやあ己が試験をしこやる、

(山口) ちよいと待ち給へ、まだ計略が完全でないよ、――

女中が下手の襦をあげる、

(女中) (下宿屋の女中のやうなぞんざいな口調



49

6号

で) 山口さん、お客さまですよ、

(山口) や、秉やかつたか、――

~~あんなに~~ かつたかね、

(女中) 濱村さんと云ふ方ですつて、

(山口) うん、よし、此處へ通してくれ、

(女中) はあ、

女中おて行く。

(山口) (女中の後を急<sup>かけ</sup>つて立ち上りながら) 待て

待て、己が引つ張つて来る、

(光子) 山口さん、あなた駄目よ、その顔の墨

~~名前~~ 名前は聞かな



44

を落~~こ~~なくつちや、

して置か

(山口) (慌てて鼻を押さへる)

さうかさうか

こいつあいけねえ、

(野田) (一緒に なって鼻を押さへ~~な~~なかう

ロウロする) 奥さん、奥さん、早く手拭ひを

貸して下さい、

(光子) (障子の外を覗きあして) その手すり

に懸かってみますわ、

(藤田) ちや、已が行つて二三分<sup>ほど</sup>外で話してて

やろう、



45

6号

三人とも大急ぎで、藤沼は下手の禰から廊下へ駆け去り、野田と山口は障子をあけて縁側へ飛び出し、手拭ひで顔の墨をこする。光子は火鉢に手をかざしていやに落ち着いてゐる風だつたが、やがて彼女も鏡台の前へ行つて身づくろひを始める。

(山口の聲) (障子の外から) 大丈夫ですかね、

まだ来やしませんかね、

(光子) (合はせ鏡をしながら、上の空で) ええ、まだ、――



46

6号

6号

(野田の聲) (障子の間から手を出して) 奥さん、

その鏡を貸して下さい、

(光子) はあ、

持ってる鏡を渡してやり、着物の襟を  
直してゐる、

(山口の聲) (同じやうに手を出して) 奥さん、

その鉄瓶を貸して下さい、

(光子) はあ、

鉄瓶を渡してやる、

(野田の聲) 大変だこりやあ、どうして●なか



47

朝  
行

なか落ちやしないぞ、

(山口の聲)

どれ、どれ、もうちよつとそこを

拭いたらいい、そのくらゐで今リやしないよ。

(野田の聲)

いや、いかん、己は~~湯敷~~湯敷

へ行つて来る、

(山口の聲)

~~まあ~~まあ待てよ、湯に言入るなら己

も行くがね、

(光子)

まあ、春代さんが来るとなつたら、大

さう急におめかしになるのね、

(山口の聲)

なあに、さうぢやあないんですよ



48

別行

別行

まだ計略が完全でないから、湯殿へ行つても  
う一度よく謀し合はせて置きたいんですよ。  
あれで濱村は神経過敏の方だから、  
をきめてよつぽど巧く持ち込まないと、……  
(光子) しッ、しッ、今梯子段を上つて来たわ  
よ、  
(野田の聲) ちや、己だけちよいと行つて来る、  
(山口) ~~おれはもういふことがない~~ (鉄瓶をさげ  
て障のぬへ言入つて来ながら、~~ヒソヒソ~~  
聲で) おい、野田、止せッたら、あとで藤



4.9

6号

沼と三人で行くから。——もうそれで大丈夫  
だよ、分りやしないツてば、

(野田)(座敷の方へぬつと顔をつき出して)此れ  
でいいですか、奥さん、

光子) 大丈夫よ、早く此方へお這入んなさい  
よ、

野田と山口、鏡と鉄瓶をもとの位置に置  
き、急いでチャブ台の傍へ戻る。二人の顔  
にはもう墨のあとは見えなくなつて  
ぬる。光子も其の間に鏡台の前を離れて火



50

16号

鉢の方へ来る。

襖を一尺ばかり明けて藤沼が首を出し、  
野田と山口の面相を夕口夕口見ながら、

(藤沼) 光子、少しその辺を片づけたらどうだい、  
い、あんまりひどく散らかつてゐるから、

(山口) (藤沼に眼めくばせして、うなづいて見  
せる) いいよ、これで。どうせ又散らかるん

だから、

(濱村の聲) (藤沼の後ろから) やあ、相変らず  
御盛んならったね、



51

6号

(山口)

~~何喰はぬ顔で杯を手にし~~

なからやあ、失敬、這入り給へ、今日は朝

から打つ通し ~~な~~ んだよ、

濱村、藤沼と共に這入つて来る。髪をき

れいに分けて満洒たる背廣服を着、派手な

靴下をはいてゐる。 ~~気障ではあるが好~~

(藤沼)

さあ、まあ此方へ来給へ、

(濱村)

え、ありがと、……(ツボンの皺を気に

しながらヤブ台の下手にすわる) 僕あどう



52 / 6号

も、諸君のやうに酒がいけないもんだから、

~~~~~

(藤沼)

まあいいさ、一杯やるさ、(もとの席に

戻り、二三本の燗徳利に觸つて見ながら)こり

やあいか、みんな酒が冷えちやつたぞ、(残

つた酒を一本の徳利に寄せ集めて)おい、こ

いつを一つ付け直してくれ、

(光子)

はあ、

立ち上りしなに坐蒲團を持って、濱村の

所へ来る。以上の間、濱村は絶えずコッソ

正月だから

53

6号

6

リと光子に注意を配つてゐる。

(光子) (濱村に) どうぞお敷き下さいまし、

(濱村) や、奥さんですか、僕は濱村です、

(光子) ようこそ、――

兩人挨拶する、

(濱村) お初にお目にかかりますと申し上げた

いところですか、^{居り}お顔は始終樂劇座の時分に

舞台上で拜見して^なました。たしか樂屋へも二

三度伺つた筈^な……

(光子) ~~さうでござい~~ましたかしら、

54

65

さひなから千ヤブ台の上の徳判を取り、
すうツと立って火鉢の傍へ戻って来て、お
燭をつける。

(野田) (けげんな顔つきで濱村を見る) おい、
時に君は独りか、

(濱村) ああ、独りだよ、なぜ?

(野田) 春代をつれて来なかつたのか、

(濱村) あんな者は君、姐めから一緒ぢやあな
いんだもの、

(野田) 嘘をつけ、一緒に泊つてゐる癖に、

55

別
行

(濱村) (内心得意さうにニヤニヤしながら、
ラリと光子の顔色を見て) さうぢやないんだ、
熱海へ来たら偶然彼奴^{あいつ}に遇^あつちやつたんだ、
(山口) どうも今朝の様子ぢやあさう云ふ風に
は見えなかつたぜ、
(濱村) いや、ほんとうだよ、彼奴^{あいつ}は一週間も
前から旦那と一緒に来てゐるんだ、
(野田) 旦那と一緒に来てゐるものが、
人で散失する筈はないぢやないか、
(濱村) ところかゝね、その旦那と云ふのかゝね、

56

別
行

用事が出来て二三日東京へ行つたもんだから
ちよいとその留守に會つた譯なのさ、

(藤田) まさか偶然遇つたんぢやあるま

い、

(濱村) うん、実を云ふと、電報で呼び出しが
来たもんだから、

(野田) おいおい、新年早々のろけるない、

(濱村) だって君たちが聞くから悪いさ、

~~ツケツトから銀のシガレツトケースを出して下~~

ツケツトから銀のシガレツトケースを出して下

57

別行

妙にや、に下つた恰好で金口の煙草を吸ひなが
ら考へて見ると彼奴も可哀さうなもんだよ
何しろその旦那たるや恐ろしく汚い
だから、たまに命の洗濯いらぬしたくなる
のは當り前だね、
(山口) それで濱村が命の洗濯係りなのかい、
(濱村) まあ、その係りを時々仰せつけられる
のさ。しかし旦那が帰つて来ると熱海ぢや都
合が悪いから、僕だけ此方へ宿を換へようと
思ふんだからね。

58

16号

(野田) 畜生、太い奴だ、罰金に一杯飲め、(杯
を~~突~~きつける) 奥さん、まだお燗はつきませ
んかね、
(光子) 少し~~早~~いかと思ひますけれど、
徳利を取って野田に渡す、
(野田) さあ、一杯やれ、
(濱村) (出された杯を受け取らう)ともし~~な~~
いで、酒は~~勘~~忍してくれ給へ、僕は一滴もい
けないんだから、
(山口) 嘘だと思ふなら春代に聞いて見給へか

59

6号

ね、

(濱村)

~~うん、~~ まあそこらだ、

(野田)

いよいよ以て怪しからん奴だ、

い
と
飲
み
乾
す、
さ
み
な
か
ら、
そ
の
杆
に
独
り
で
酌
を
し
て
ぐ

(藤沼)

旦那が居ないなら ~~一つ~~ 春代氏を呼

ばうぢやないか。 ~~(野田と山口に眼くはせ~~

する) 春代氏が居ないぢや面白くないよ、

(野田)

~~濱村、~~ 電話をかけろよ、

(濱村)

駄目だよ君、呼んだつて来やあしない

60 6号

よ、

(藤沼)

君が呼んだら来るだらうかい、

(濱村)

(勿体ぶつて)

いいや、駄目だよ、呼ん

だところで仕様がないうさ、

(野田)

まあ、さう云はずに呼べと云つたら、

——いやに出し惜しみをしやあがるな、

(濱村)

ふん、

鼻の先でニヤリと笑ふ。その態度がイヤ

味たつぷりなので一同

~~ますます~~

反感を持つ

たらしく、ちよつとの問座が白ける。

~~61~~ 61

(山口) (その場を取りなすやうな口調で) 濱村
君、君お場へ這入らないかね、ここの温泉も
悪くはないぜ、

(濱村) ええ、ありがと、実は這入りたいんだ
けれど、洋服を着てゐて面倒だから、まあ引
つ、越して来てからにしようか。

(山口) さうか、それもさうだな、——ちやあ
失敬して ~~三人~~ 三人で這入つて来うちやないか、
……(藤沼の方へ頻りに意味ありげな眼くばせ
をしなから) ~~どうだい~~ ~~また酔つ拂ふ~~

藤沼、

と●今日も這入りそくなつちませ、

(野田) (同じく藤沼に眼顔で知らせる) うん、

今うちに這入つて置かうよ、(濱村に) 君、

失敬だけれどほんの五分ばかりだから待って

てくれ給へ、

(濱村) ああ、どうぞお構ひなく、

(野田) ほんとうに君、帰つちやいかんぜ、

(濱村) なあに、どうせ用がないんだから、此

處で奥さんと話してゐるよ、

~~（野田）（同じく藤沼に眼顔で知らせる）うん、今うちに入つて置かうよ、（濱村に）君、失敬だけれどほんの五分ばかりだから待っててくれ給へ、（濱村）ああ、どうぞお構ひなく、（野田）ほんとうに君、帰つちやいかんぜ、（濱村）なあに、どうせ用がないんだから、此處で奥さんと話してゐるよ、~~

(藤田) それぢやあ己もお附き合ひに行つて来
 るかな、(濱村に) 何しろ君、かう云ふ悪友が
 附いてゐるんで、朝から晩まで酒ばかり飲ま
~~る~~^せるもんだから、此の二三日、湯へ這入る暇
 もないんだよ、
 (山口) まだ三人とも大晦日の垢を落さないツ
 て始末だからね、
 (濱村) (取つて附けたやうに笑ふ) あははは、
 (藤田) 直ぐだから君、ほんとうにゆつくりし
 てツてくれ給へ、

64

6号

(濱村)

ええ、ありがと、

(藤沼)

いいかい、光子、(さう云つて又眼くば

せする)

お茶でも入れて、何かお菓子でも取

つたらよからう、

(光子)

はあ、ちやうど此處に、東京かう届い

た西洋菓子がありますの、

以上の會話の間に、

~~藤沼は鏡台の~~

上のシヤボン箱を取り、他の二人と共に障子の外へ出て縁側を上手へ立ち去る。光子

65

65

は茶道具を引き寄せて茶を入れ、押し入れ
の中から~~菓子箱~~^{菓子}這入ったボール箱を
出して来る。濱村はぐつと見ながらバツが
悪さうに黙つてゐる。短き間。

~~濱村~~
す、

(光子に茶を出されて) や、恐れ入りま

(光子) (菓子の箱をケヤブ台に載せる) 箱のま
んまで失禮でございませうが、どうぞお摘まみ

下さいまし、

(濱村) は、……僕は甘黨の方ですから、それ

引行

では一つ頂きます。

光
子

え
え、
と
う
ぞ、

りますけれど、でも此の
 刀のお菓子よりは、
 いかましでございますの、

らかましでござい
ますの、

(濱村)

いや、僕は此の
~~チコレート~~
チコレート

のついでにある
シェウクリーム
が大好きなんです

(光子)

まあ、それは結構でしたわ。

濱村

さう、さう、さう、
 へは、あ、の、
 あなた

か
舞
台
で
シ
ユ
ウ
ク
リ
ー
ム
を
召
し
上
~~る~~
か

ありましたな、
あれは何と云ふ
~~ものか~~
だつたか

別行

67

(光子) (急にニツコリして) ああ、あの芝居を御覧になつて、

(濱村) ええ、僕はあの時分始終樂劇座へ参りましたよ、樂屋へ伺つたところもあるんですけれど、覚えてゐらっしゃらないでせうか、

(光子) はあ、わたくし、さつきはお見それ申しましたけれど、さう仰っしゃられると存じて居りますわ。

(濱村) さうでせう、どうも覚えてゐらっしゃ

68

別
行

別
行

やうなけりやならない筈だと思つたんですが、
(光子) ~~それ~~ でも何ですか、あの時
分よりはお若くなつたわ、
(濱村) (うれしそうに) へえ、さうですか知ら
ず、
(光子) (妙な色目を使って) ええ、ほんとうに、
(濱村) それぢやあ何か奢りますか、
(光子) ええ、是非奢つて頂きますわ、
(濱村) ですが、さうさうちやあ何ですか、あ
なたも縁からあの時分とはお變りになりまし

別行

69

たね。あの時分には僕なんぞが挨拶しても言葉もかけて下さらないんで、何だか斯う、うっかり傍へ寄りつけないやうな気がしましたよ。

(光子) わたくしね、正直なことを申しますとあの時分はあなたが大嫌ひだったんですの。濱村さんて云ふ方は、^{きざ}気障な、イヤ味な方だと思つて居りましたわ。

(濱村) いや、こいつあどうも手きびしいな、――
ちやあ今はどうです、

(光子) ^{きざ}気障なところが大変おなくなりになつ

たわ。ほんとうに、——お世辞を云ふんぢや
 ないんですの。

(濱村) あははは、どうだかなあ、

(光子) いいえ、ほんとう、……うっわいて、

火箸を握つて、灰の中をぐるぐる掻き回しな
 から) ほんとうよ、だから春代さんかお騒が
 になるのも無理はないわ。

(濱村) 奥さん、もうどうかその、春代の話は
 願ひ下げにしたいもんですね、彼奴あ腐れ縁
 なんで、今更油を搾られる値はないんです

價

71

むづかしい

から。

(光子)

腐れ縁だから、尚更離れられないんで

せう、

(濱村)

なあに、離れるの離れないのって、そ

んな件ぢやないんですよ。

(光子)

ぢやあ、どう云ふ件なの？

(濱村)

まあお互ひに、その場の限りのなびの気持ちで

みたんですが、もう

此の頃 ~~は~~ ~~熟~~ ~~万~~も飽きて来ちまつたんで、

どうせ長いとはありませんよ。それに何で

72

す、

~~春代の娘も~~

だんだん年を取つて来て、妙

に考へか^か世帯じみて来^きやか^かつたんで、女優を

止めようかなんて云つてゐるんです。~~あんな~~

~~あんな~~あんなつちや女も

おしまひですわね、

(光子) あら、どうぞお静かに、

(濱村) や、こりやあ御免下さい、だけどあな

たは例外ですよ、

(光子) 駄目よ、あとからごまかしたツて、

(濱村) いや、ご^かま^しぢやないんです。~~あんな~~

さう云はれると困るけれど、決して

譯
が
違
ひ
ま
す
よ、

——だつてさうぢやありませんか、春代が
堅儀にな^りたいと云ふのは、つまりあの親父
に金で買はれて、~~あんなに~~安^めになるこ

とふ意味なんだが、あなたのは~~あんなに~~

~~あんなに~~あなたは藤沼君と仲
は非常に花やかなローマンスなんだから。

(光子) まあ、今度はあたしが見る番ね、

(濱村) 實際ですよ、藤沼君があなたを手に入
れたと聞いた時にや、随分僕等は羨ましかつ
たもんですよ。特に今日のやうに、至^む極^つお睦

ましいところを見せられたりしちやあね、

(光子) さうを、そんなに睡ましさうに見えて？、

(濱村) たつて、事実がさうに違ひないんぢやありませんか。

(光子) でも、実はそれほどもないのよ、――

――~~皆さん~~があたし~~たち~~の事を仲が好い好

いッて~~皆さん~~仰^{おしやる}んですけれど、そりやあ~~あ~~初めの

うちたけたつたわ。

(濱村) へ、御冗談でせう、藤沼君はまるであ

(熱心に膝をのり出す)

75

なかに眼^めがないつてふ評判ですぜ、

(光子) ええ、藤沼はそりやあさうよ、だけど

濱村) だけど何です

え、

(光子) まあ、そんなことはえはずに置く

わ、

(濱村) > 云ったつていいぢやありませんか、え

え、
だ、
けど何ですよ、

(光子) 一口には云へないけれど、

~~~~~



実は

もう一度

あたし、舞台に立ちたいのよ、

(濱村) どうぞふ譯で？

(光子) だから、それがなかなか簡単には云

~~へ~~ないのよ、

(濱村) あなたがもう一度女優にならおなると

ふふなあ、僕あ大いに賛成ですなあ。——藤

沼いいけないつてふんですか、

(光子) ええ、まあ不賛成の方なの。それに何

だわ、そんな事になりやしても藤沼の國の方

で黙つておしなないわ、それでなくつても



あんな女と喰ッ着いてゐれば、<sup>勘</sup>當するの、<sup>学</sup>費を送らないのツて、<sup>や</sup>かまし<sup>い</sup>ツたらない  
 んですもの。もう好い加減クサクサしちやつ  
 たわ、

(濱村) 成るほどなあ、さう云ふことはあるで  
 せうなあ、

(光子) ですからあたし、まだ藤沼にはなんに  
 も話しちやあないんですけれど、いつれその  
 うちに自由な体になりたいと思つてゐるんで  
 すの。藉を入れてくれるんぢやあなし、いつ



何時<sup>なんじき</sup>おツ放<sup>はな</sup>り出されるか分りやしないんだし、

……

(濱村) いや、藤沼君がそんなことをする筈は

ないでせう、あんなにあなたを可愛がつてみるん~~だ~~だから、

(光子) だけど、ちっとも有り難かあないわ、

——それにあの人は望みがないと思ふんです

の、人間はいいんですけれど、からツきしお坊ツちやんで、ちつとも世間を知らないんですもの。



(濱村) そりゃあ、あなたの眼から見れば大概な男はお坊っちゃんでせうよ、

(光子) あら、人が真面目で話してゐるのを、

冷やかしたりなんかするもんぢやないわ。あ

たしあなたを信用して相談しようと思つてゐるのに、そんなことを云ふならもう云はないわ。

(濱村) (自分で自分の口の端を<sup>つね</sup>抓りながら) 畜生

！又これでしくじつたか、僕あほんとにオツチョクチョイだもんだから、いつでも止れでや



80

6号

リ損<sup>そこな</sup>ふなんだ、(お辞儀をする) 此の通り詫<sup>ちや</sup>ま  
りますよ、だから信用して下さいよ、

(光子) いやいや、もう云はないわ、

縁側にミシミシ~~ミシミシ~~足音が聞えるので  
二人とも急に黙つてしまふ。短き間。藤沼  
以下三人の姿がカラスの外に見える。めい  
めい濡れた手拭ひを欄干にかけ、障子をあ  
けて言入つて来る。

(藤沼) (シャボン箱を鏡台に置きながら) あーあ  
これでさっぱりした、(濱村に) どうも君失禮、



81

6号

別行

(濱村) なあに、意慮なくお菓子を摘まんてるところさ、

(野田) あーあ、久しぶりで好い気持ちだ、何か運動でもしたいな、

(山口) 実際だよ、すわり込んで酒ばかり飲んでちや体に毒だよ、何か適当な室内~~の~~遊戯はないもんかな、

その間に野田は上手の碁盤の方へ歩いて来る。

(野田) (碁盤の前にすわりながら) おい山口、



82

一番来い、

(山口)

もう墓は御免だよ、

(藤沼)

墓だつて毒だよ、ちつとも運動にやな

らんぢやないか、

(野田)

よしよし、ぢやあ己がいい事をやつて

見せる、

(さみながら散らばつてゐる墓石を

集めて墓石の中に

~~入れ、~~

それを墓盤の上にの

せて)

さあいいか、こいつを己が片手で

~~持ち~~

ちやげて見せる、

みてくれ、

んだ、

どのくらゐ上るか見て



89

6号 別行

6号

(藤沼)

ふん、また野田の力自慢か、

野田、右の平手<sup>ひらて</sup>を<sup>を</sup>碁盤の底へあて、ウ

ンと力みながら持ち上げて、一生懸命に支へてゐる。藤沼と山口はその傍<sup>そば</sup>に突ツ立つて見物してゐる。

(山口)

何だい、その碁盤は軽いんだらう、

(藤沼)

そんな事なら己にだつてお来さうだぜ、

(野田)

え、……うツと、……

次第にくたひれて碁盤をおろす、

(野田)

さあ、お来るなら誰でもやつて見ろ、



84

6号

今はたしかに一尺ぐみ上ったわう、——藤沼、やって見ろよ一つ、

(藤沼) 出来なくつてよそんな事が、(暮盤の

前にすわる) いいか、ほら、見てゐろ、——

う、……うーッ、……

同じく ~~それ~~ 持ち上げる、が、わざ

と野田より力のないやうなふりをして、や

つと五寸ばかり持ち上げて、すぐへたへ

た ~~になり~~ かける。

(野田) そう見ろ貴様、己 ~~半~~ 半分も上らんや

9



ないか、

(藤沼) (とうとうべつたりと碁盤をおろす) ああ  
いかん、畜生、とても重いや、

(山口) どうも意気地<sup>いけぢ</sup>がない奴だなあ、女に惚  
れられるやうな男は力がないと相場がきまつ  
てゐるんだなあ、

(野田) あそこにも一人色男がゐるぜ<sup>ド</sup>、おい濱  
村、君に此れが持ち上るかい、

(濱村) ふざけちやあいかんよ、

~~~~~~~~~  
僕だつて君くら

86

6号

みな物は持ち上るさ、

(藤沼) (変におだてるやうな口調で) さうだな、

見たところはきやしやだけれど、此れで案外

濱村は腕力があるかも知れんな、

(野田) ふん！ ぢやあ此處へ来てやつて見給

へ、

(濱村) ようし、さう僕を馬鹿にするんなら、

――

さひながら立ち上~~る~~
つて其處のちへ来る、

(山口) 待て待て、碁盤の上ヅこぢやあ面白

87 6号

くないから、孰^ど方が強いが腕角力をやつて見
給へ、
(藤沼) そいつあよからう、
ハツキリするから、
(野田) よし、何でも来い！ 女の取リツこぢ
やあ負けるかも知れんが、腕角力ぢやあ濱村
なんぞに負けやせんから、
(濱村) まあ威張るなら勝つてからにし給へ、
色男だつて力がないたあ限らんからね、
兩人碁盤の傍^{そば}にうづくまり、
田驥^{でんぎ}の上で兩

88

6号

6号

腕を組む。

(山口) いいか、己がアンハイアだぞー——

ニイバ

女中が下手の襦をあげる、

(女中) あ、濱村さんとおふ方にお電話でじ

ざいます、

(山口) (頓興な聲で) そうら来た、誰から電話

だ、

(女中) 熱海の春陽館からですって。名前を伝

ったんですけれど、さう云へば分るって仰つ

しやる●んですの、
~~もうその人は帰ったと云つてく~~

(濱村) ~~もうその人は帰ったと云つてく~~
 れ給へ、

(藤沼) (急に) いら^う聲を出して) いかんいかん!

呼ばなきやあいかん!

(女中) (濱村に) ですけれど、おいでになりま
 すつてさう申しましたわ!

(濱村) (顔をしかめる) 困るなあどうも、おい
 でになると思ひましたらたつた今お帰りにな
 りましたツて、――

90

6号

(野田) (女中に) そんなことを云つちやあいか
んぞ、おい濱村、電話に出ろよ、面白いこと
をしてゐるから是非入らうッしやいッて、さう
云へよ、
(山口) よしよし、己が代理に
出あて行かうとする、
(濱村) (慌てて山口の手を引つ張る) おい、山
口、止せよそんないたづらをするなあ、
(藤沼) ~~あつははは、構はん~~
構はん、早くさう云へよ、己が責任を負ふか

91

6号

6号

らいいよ、

(山口)

よし、心得た、

(濱村)

おい、止セツたらー、

山口、振り拂つて去る行く。

(野田)

しツかりやれ、ぬかつちやあいかんぞ

去ひなから、後を追はうとする濱村の前
に立ちふさがる。

(女中)

(あつけに取られて)

まあ、大変な騒ぎ

ですこと、

92/6号

別行

(藤沼) あつははは、(女中に) まあ見ておいで

よ、今に非常な別嬪が来るんだから、

(女中) あら、ほんとですか、

(野田) ほんとだとも、……三浦春代ッてふ

女優を ~~お花さん~~ は知らないかね、

(女中) ええ、寫真で見たことがありますわ、

(野田) それそれ、……それが今こゝへ来るん

だよ、……

此の問答の間、野田と濱村とは互みに行
かう行かせまいとして、部屋の中をうろう

ろする。

(女中)

おほほほ、まあ何をしてゐらッしやる

の、

(濱村)

~~おほほほ~~

(野田に)

おい、兎に角僕を出させ

てくれ

~~おほほほ~~

山口の奴、何を云ふか分らんか

ら、

~~おほほほ~~

(藤沼)

いや、当人を出しちやあいかん、(濱村

振り切つておようとする)

駄目だ駄目だ、(野

(田に)

おい、おしちやあいかんたら！

(濱村)

いや、ちよいと、……ちよいとでいい

94

6号

別行

から、……

(野田) (濱村の肘をしつかり捉へる) いいや、い

かん、おれは貴様は、断らうことわッて云ふ気なん

だらう、

(濱村) いや、ちよいと、……ちよいとでいい

から、

(野田) よし、そんなら己も一緒に附いて行く、

野田、濱村の肘を捉へたまま、二人で出

て行く。

(女中) (濱村の後を見送りながら、藤沼に) あの

95

16号

別行

方が、春代さんておふ方の何かなんのですの？

(藤沼) うん、まあ何かさ、どうだい、ちよい

と好い男だらう、

(女中) ええ、なかなかお綺麗な方ですわ、

(藤沼) じゃあ、●お花さんに一つ世話をしよ

うか、

(女中) あらいやだ、知りませんわ、おほほほ、

……

女中、襦をしまてくる。

短き間。光子はさつきから、妙に黙り込

ないよ、

(光子) さっき、風呂場で何を相談してみらし
つたの、

(藤沼) いきなり腕角力と云ふと変だから、最
初に碁盤の持ちやゲツコをして、わざと己が
力のないやうな風を見せて、それからだんだ
んに釣り込んだ方が自然だと云ふのさ。――
万事山口の計略なんだよ、

(光子) うふ、……………おかしな人ね、山口さん
は、

98

(藤沼) 彼女^{あいつ}あなかな陰険だよ、空^{そら}ツ惚^{とぼ}けて
 みやあがつて、腹の中ぢやあ始終何かしら、
 しんねりむいつり考へ込んでゐるんだから。――
 ―― あ、さうさへばお前、さっきの漆^{しほ}粉^{こな}は何
 處にあるんだ、
 (光子) ああ、あれ、………(麦に落ち着いで火^た態度)
 鉢^{まは}の周りをうろろと見廻し、傍^{そば}にある皿を
 頭で示す) 此處にあるわ、
 (藤沼) 馬鹿馬鹿、そんなところに置いといち
 やいかんよ、押し入れの中へしまつとくんた

99

16号

よ、

(光子)

それで、どうするの？

(藤沼)

いよいよと云ふ時に、インキを皿へあ

けた積りにして出して来るんだ——いいか

い、お前のする役だぜ、

(光子)

うふ、……

気が進まないやうな笑ひ方をしながら、皿
を押入れの中へ持つて行く。

(藤沼)

あ、それから筆の太いのがあるかい、

——ちよつと、その硯箱を見せて御覧、

100

別行

16号

(光子) (硯箱を渡しながら) あるけれど、みんな墨で固^{かた}まつてゐるわ、

(藤沼) (一番太い筆を取って) よしよし、こいつをきれいに洗っておくれよ、

筆を光子に渡さうとする。

(光子) (受け取らうともしないで) だって、今のうちから洗って置いちゃあ変ぢやないの、

(藤沼) うん、それもさうだな、——ぢやあ、

あとでお前が洗ってくれるか、

(光子) ええ、洗ふわ、

101

6号

6号

藤沼、筆を硯箱へ入れる。同時に下手の
襖があいて、濱村一人だけ這入つて来る。
藤沼（濱村に） どうしたんだい、
濱村 いや、どうも困るよ、山口や何^{なん}かが餘
計なことを言やあがつて、――
さひなから~~すわ~~すわる
藤沼 一体来るのか来ないのかい、
濱村 来やあしないさ、来るなと云つて電話
を切つちまつたから、
藤沼 そりやあいかん、――あとの二人は

102

6号

どうしたんだ？

(濱村) 一旦切つたのに、又電話をかけて呼び

出すつて騒いでるんだよ、無論かけたつて来

やしないかね、

廊下をバタバタと~~騒~~足音が聞えて、野

田が襖から顔を出す。

(野田) おい、藤沼、君~~も~~奥さんでもちよいと

電話へ出てくれ給へ、
藤沼の奥さんが久

しぶりでお目にかかりたいから、是非おいで

下をいッてさう云はうと思ふんだかね、
独り

103

6号

者のさふ事がやあ信用がなくつていかんから、

(光子) それはあたしぢやあ駄目だわ、断^{ことわ}られ

ると、押し切つてそれでもとは云へませんも

の、

(藤沼) よし、己が出てやる、(立ち上る) 先^{さき}は電

話へ出てゐるのか、

(野田) 今山口が呼び出してゐるところなんだ

よ、……

野田と藤沼、襖を明けつ放しにして急い

104

6号

6号

別行

6号

で出て行く。

(光子) 濱村さん、そこをどうか締め上げて頂戴、

(濱村) へえ、

襖をしめる。

(光子) それからね、ちよいとその碁盤のところにへ来て頂戴、

(濱村) (ケゲンさうに) へえ、

碁盤の所へ行く。

(光子) あなたね、野田さんと孰方どっちが力があるか、その碁盤を一杯いっぱい持ち上げて見て頂戴、

精

105

6号

別行

(濱村) (ますますけげんそうに) なぜですか、
(光子) なぜでもないわよ、早くなさへよ、
(濱村) へえ、よござんす、ちやあ見てらッし
やい、――

濱村、前と同じ方法で、
~~野田より~~ 一生懸命に呻りながら
碁盤を持ち上げる。野田より ~~高く上~~
る。そしてより長い間 ^{あんな} 支へてゐる。光子は
伸び上つて、ちつとそれを見つめる。

(光子) まあ、あなたの方がずっと力があり

106

になるわ、

(濱村) (碁盤をおろす) どうです、此れで見か

けによらないでせう、

(光子) いいえね、実はあなたを腕角力で負か

して、顔へ^{サダ}漆粉を塗ってやらうと云ふ相談が

あるのよ、

(濱村) へーえ、いつです？、

(光子) 今^サ日よ、——あなたかおいでになると

云ふので、あの連中がちゃんと相談しておい

たの。

(濱村)

そりやあ駄目ですよ、

僕

五

な
か
な
か
負

け
か
し
ま
せ
ん
よ。

たつて

此
庚

ちやあ野田か

番強いんでせうかい

(光子)

野田さんと藤沼と

$$x_1 = 8$$

い
く
ら
み
な

我亦校名勤月之人云云

へさつ

きはわざと藤沼の方が弱いふりをして見せた

9/17
MAY

濱村

へーえ、

どう云ふ譯でいふ

光子

最初野田さんがあなたと
するでせう。

108

やうどいい勝負だと云つて、顔へインキを塗
る約束で、あなたを負かしてやらうと云ふの
よ、

(濱村) なあるほど、それで春代を呼ばう呼ば
うと云ふんですか、

(光子) ええ、さうなの、

(濱村) なんだかどうも、 様子が変だと思ひ

ましたよ。——ぢやあ、僕が野田に勝つちや
つたらどうなるんですか、

(光子) さうしたら藤沼は、應戦しないことに

109

なつてみますの。——何しろそのインキが大
変な物なんですもの、グリーンの染料^{そめこ}を溶^とか
したので、顔へ着けたら一週間ぐらゐ剥^はげや
しないわ、

(濱村) あははは、ひどいたくらみかあつたん
だなあ、

(光子) それを塗る役があたしなん^でせう、だ
からあたし、ほんとうに心配しちやつたけれ
ど、……でもよかつたわ、あなたの方が力が
あつて、……

(濱村)

さうぢやないでせう。

僕の面^{つら}へ塗るんなら構はないが、若しひよ^いッとして御亭主の

方へ塗ることになつたら大変だから、それが

心配だつたんでせう。

(光子)

又あなたはさう云ふ皮肉を仰つしやる

のぬ、人が折角気を揉んで、親切に教へて上

げるのに、……

(濱村)

(冗談らしく)

ぢやあとうであ、僕がわ

ざと野田に負けといて、あとで藤沼君を負か

してやつたら？、

///

(光子) ええ、いいわ、構はないわ、

(濱村) それで、そのインキを塗ってや

~~る~~ んですぜ、

(光子) ええ、

(濱村) あなたが自分で、

(光子) ええ、いいわ、

(濱村) あははは、まあ止ませうよ、恨まれ

ちやあ抗^{かな}はないから。

(光子) いいわ、さうして御覧なさいよ、

(濱村) ぢや、ほんとうにいいんですか？、

112

6号

(光子)

ええ、

いいわ、

~~みんなに~~

疑^{うた}いられ

ないやうに、

巧^{うま}く

おやりになりさへすれば、

……

(濱村)

よじざんすとも、そいつあちやんと心

得^えてますよ、

短^{みづか}き間。

濱村、暑^{あつ}盤^{ばん}をもとの通^{とほ}りに直^{ただ}しド

下^{しも}手^ての

席^{せき}へ戻^{もど}つて来^きて梧^わわる。

(光子)

どうしたんでせう、電話^{でんわ}が大^{だい}分^{ぶん}長^{なが}いの

ね、

(濱村)

何か三人でからかつて居^ゐるんでせよ、

1/3 63号

いくら何と云つたつて来やしませんよ、

(光子) でも、若し来たらどうなさるの、

(濱村) 来たつて會やあしませんよ、もう彼奴

には用はないんです、

(光子) ほんとうに？、

(濱村) ええ、ほんとうですよ、実はあんまり

うるさいから此方へ逃げて来たんですよ、

(光子) 大分^{だいぶん}さつきのお話とは違ふのね、

(濱村) なあに、實際さうなんです、

三人どやどやと廊下を戻つて来る。高い

114

6号

6号

笑ひ聲に交つてしめたぞしめたぞ」と
口口にふのか聞える。
(山口) (かうりと襖をあけて) さあ、しめたぞ
とうとう己が口説き落してしまつたぞ、
野田と藤沼、山口のあとから這入つて来
る。
(野田) (濱村に) おい、春代が来るとよ、
(濱村) うそだらうぞ、
(藤沼) 馬鹿をえへ、今すぐ自働車でやって来
るんだ、——ああ、ひどく骨を折らせやかつ

115

たな、
(濱村) 来たつて、
(山口) 此方のお客様だからさうは行かんよ、
君はまあ落ち着いてゆつくりしてゐるさ、
(藤田) としつでさつきの腕角力はどうしたん
だ、
(野田) うん、さうさう、(濱村) の上手へ来てす
わる、さあまい、一番、——どうせ貴様は負
けるんだから、春代の来ないうちかよ
からう、

116

16号

(濱村)

僕あもう帰るよ、

まひなから、~~まひなから~~立ちかける。

(藤沼)

(後ろから濱村をおさへつける)

いかん

いかんー

~~いかに帰ろうか~~

帰ろうツ

たつて帰しやしないぞ、

(光子)

濱村さん、お逃げになるなんて卑怯だ

わ、

(山口)

君、まあ一つたつて見給へよ、負けた

ところで色男の資格にや

よ、

あ、拘かかはりやしな

別行

117

(濱村) いや、僕は何も、腕角力なんか恐れて
やしないさ、

(野田) 恐れてゐなけりやあ一番やれ、でなけ
りや貴様あ卑怯だぞ、

(濱村) 君やあ何かい、そんなことを云つて、
ほんとに僕に勝てる ^{續り} ~~で~~ みるのかい？

(野田) さうさう、さう来なくつちや ~~い~~ かん
口惜しけりやあやつて見ろよ、

(濱村) くよし、そんなに威張るなら ~~う~~
拵つてやるから、

(グツと野田の方へ向き直つて)

118

16号 6号

(山口) 待った、待った、
~~己~~己がアンパイア

野田と濱村の^{あひだ}ま
に^{あひだ}に兩人手を組み合はせる。その

(山口) いいか、一、二、三、

勝負が始まる。

(藤沼) (中腰になつて見物しながら) さあしつ
かり、しつかりやれ濱村、色男の名譽恢

復だぞ、

(光子) (相変らずつんと済まして火鉢の傍に收

719

まりながら、濱村さん、お負けになっちゃあ
駄目ですわ、春代さんが附いてみうツしやる
んだから、――

(濱村) (次第に負けて来る) こ、こいつあいか
ん、……う、……うーッど、……

(藤沼) (わざと驚いて) お、お、どうしたんだ
い、口ほどでもないぢやないか、

(山口) あ、あ、負ける、負ける、……やつは
り此りやあ野田にやあ抗^{かな}はんよ、

(藤沼) や、さう云つたもんでもないぞ、負け

120

さうに見えてなかなかしぶといぞ、野田に此
れだけ抵抗すりやあ強い方だよ
山口 ふん、色男はやっぱり色男の味方をす
るな
野田 (濱村の手をぬぎ伏せる) どうだ、参っ
たか
濱村 (口惜しさうに) 畜生、もう少しだつた
んだかなあ
野田 あははは、馬鹿(あ)なふな、てんで貴
様にやあ勝目はないぞ

121

(光子) 野田さんは野蠻人^{やばんじん}だわ、一遍誰かが負

かしてやるといいんだけれど。

(濱村) よし、ぢやあもう一遍来い。

(野田) あははは、貴様なんか相手にならんよ。

~~藤沼~~ 藤沼とちやうどいい勝負だ。

(濱村) いいや、いかん、どうしても貴様とも

う一度だ、外^{ほか}の奴等ぢや相手にならん。

(藤沼) おい、濱村、さう己^{おれ}を輕蔑するなよ。

いくら己だつて貴様なんかにや負けやしない

ぞ。

(濱村) 藤沼なんぞ問題にならんよ、野田でなくつちやあ駄目だよ。

(山口) 此れで濱村は、案外負け惜しみが強いんだなあ。

(野田) まあ藤沼とやつて見ろよ、藤沼に勝つたう、己^{おれ}が相手になつて遣^{つか}はす。

(藤沼) (濱村の前へいざり出る) おい、一番面白い！ 問題にならんやなんて云やあかつて、

聞き捨てにならん。

(濱村) 君はまあ引つ込んで給へ、負けすと奥

123

さんに恨まれるから。

(光子) (藤沼に) それよりはあなた、濱村さん
を負かしたりすると、春代さんに恨まれるわ
よ。

(藤沼) 恨まれたつて構あもんか、春代を一つ
泣かしてやるさ、(手をさし出して) さあ来い
一番。

(濱村) さう ~~し~~ しつつこくやつて来られ
ちやあ仕様がないな、已むを得ず引導を渡し
てやるかな。—— よござんすか、奥さん。

僕あ弱い者を相手にするのは嫌ひなんだかい

124

| | | |
|----|-------------------|------------|
| 光子 | ええ、どうぞ、 | たんと負かしてやつて |
| 頂戴 | | |
| 山口 | 此りやあ | 好取組だね、何し |
| ろ | 双方に女が附いてゐて、 | 黄色い聲で「フレ |
| フレ | をやってるんだから。 | |
| 野田 | ただで見るのは惜しいもんだぜ。 | |
| 山口 | 全くだ、こいつあ何か賭けた方がいい | |
| なる | | |
| 野田 | 負けた方が墨を塗られるとしたらどう | |
| たい | | |

125

6号

(濱村)

賛成！

(藤沼)

賛成！

兩人同時に手を挙げて叫ぶ。

(野田)

あッははは、孰^{どっち}方も弱い癖^{くせ}に鼻息が荒

いや。

(山口)

だが待てよ、墨ぢやあどうも平九過ぎ

るな。

(藤沼)

(光子に)

おいおい、

そこに己^{おれ}の

~~インキ~~

があつたらう。

(光子)

ええ。

126

(藤沼)

そのインキにしたらいいや、

(濱村)

おい、いいのかい、そんなことを云つ

て？、

(藤沼)

あははは、先生しは恐おそくなつたな。

(濱村)

ふざけちやあいかんよ、インキがなか

なか落ちなかつたら、あんまり君に気の毒あはれだ
からね。

(藤沼)

あははは、春代と散歩に出られなくな

つちやあ往生ざうじやうだらう。

(山口)

どうも騒ざうざう々しいこつたね、一体君たち

127

別
行

あ腕角力より口喧嘩の方が達者なんだろう。

(野田) あッははは、まあ孰^{どつ}方も安心しろよ。

シヤボンで洗へば直きに落ちるよ。

(光子) ほんとうに此のインキは大丈夫よ、す

ぐに落ちますから。――春代さんかおいでに

なつたら、急いで風呂場へ入らッしやればい

いわ。

(濱村) よじざんすか奥さん、若しも御亭主が

負けちまつたら、

(光子) ええ、いいわ、すぐにシヤボンで洗つ

128

てやりますわ。

(濱村) いかんいかん、そいつあずるいや。

(藤沼) 人の事よりか自分の事を心配しろよ。

(光子) おいおい、ちやあそのインキ

を皿へあけてな、それから筆を一本、きれいに

洗つといとくれ。

(光子) はあ。

(藤沼) インキを塗るのはお前の役だぞ、

(光子) はあ。

(山口) 奥さん、亭主が買けても依怙負をし

えこひいき

129/6号

16号

ちやあいけませんぜ。

(光子) 大丈夫よ、あたしこそ公平なるアンパ

イアだわ。

此の間^{あつた}に光子は数の子の井を取り、数の
子を茶碗にあげ、井の中へ湯をそそいで、
筆を洗ひ始める。

(野田) さあ、面白い事^{こと}だぞ、かうなつちや

あ孰^{どつち}方もうっかり負けられないぞ。

(濱村) 誰か糞、藤沼なんぞに、……

えひなから藤沼と手を組み合はせる。

130

65

勝負始まる。

(山 口)

ⅤⅠ
 ⅤⅠ
 ⅤⅠ

双方

見合つて見合つて

濱村

う、
う、

藤沼

う、
う、

野田

ど
う
だ
ど
う
だ
こ
り
や
あ
V
V
月勝負
た

熟^ビコ

方
七
八

(4) (口)

ハツケヨイ、
残った、
ハツケヨイ、

殘

フ
た、

同士の合戦とござい！

191

6号

光子、井の湯を二三度湯^いほしへあけて
筆^{しづめ}をすっかり洗つてしまひ、押し入れから
漆粉^{しそめこ}の皿^{しづめ}を持つて来る。そして藤沼のうし
ろに据わつて
~~~~~~~~~  
つてゐる。

(野田) や、藤沼、  
~~~~~~~~~  
そら行け！
そらー、もう少しだー、
~~~~~~~~~  
そこだよ、

(山口) 岡さん、用意いひですかね、そら、も  
うひと息！、ハツケヨイ、残った、ハツケヨ  
イ、……あ、あ、あ、……

(急に変な聲を出して)



132

別行

6号

6号

負けさうに ~~なつ~~ た濱村、急に形勢を盛り  
返し、猛然として藤沼の手をねぢ倒す。

(濱村) さあ、インキだ！

(藤沼) いかん、いかん、墨にしてくれ、

逃げ出さうとする、

(濱村) ~~な~~ (いきなり藤沼に跳びついて) 畜生！

逃げるなんて法があるか、奥さん、奥さん、

(野田) あッははは、こいつあ飛んだ番狂はせ

だ、

(山口) もう一遍やり直し！



133 6号 6号

(濱村) 馬鹿、そんな奴があるもんか、奥さん

インキインキ!

おひなから、藤沼を仰向きに組み伏せて  
馬乗りになる。

(藤沼) いや、墨にしてくれよ、(光子に)おい、

墨だよ墨だよ、

(濱村) インキだ、インキだ、

またか  
跨りながら片手を伸ばして、光子の傍に  
ある④漆粉の皿を引つたくる。

(光子) (わざと皿を取り返さうとして) あら、い



134

6号

けないわ、濱村さん、（泣き聲を出す）そんな  
乱暴なことをしちやあ、

（濱村）駄目です、駄目です、お放しなさいよ、

兩人皿を握み合つて争ふやうな真似をし  
ながら、ちやうど藤沼の顔へ  
を打ちまけ<sup>る。</sup>  
のう  
漆粉

（藤沼）うッ、ふッ、……何をするんだ、

（光子）あ、大変だわ、とほちまったわ、

（濱村）あッははは、此れでいいや、

（光子）（濱村を突き飛ばして、藤沼に）ちよい



135

6号

と、早く洗面所へ入らっしゃいよ、

藤沼、みんなに顔を見られないやうにし  
て起き上り、タオルで隠しながら障子の外  
へ出て、縁側を上手へ馳せ去る。おとから  
光子がシャボン箱を持って追っ駈けて行く。

(濱村)

あッははは、あ、いそ、いそ、いそ、

(野田)

あッははは、落ちるかなあ、彼れが、

(山口)

いや、なかなか落ちやせんたらう、

(何しろ)

皮肉な結果になつたね、

(野田)

あッははは、



136

別  
行

別  
行

6  
号

女中が下手の襦をあげる。

(女中) あ、お客様が入つしやいましたか、

(濱村) や、来やかつたかほんとうに、(女中

に) 済まないが君、頼むからもう帰つたと云

つてくれ給へ。

(野田) いいよ、いいよ、まあ上げてやれよ、

(濱村) いや、頼むから勘<sup>か</sup>忍<sup>に</sup>してくれ、(女中

に) 君、少し譯があるんだから、ほんとうに

さう云つてくれ給へ、後生だから、……

(女中) ちやあ、兎に角さう申して見ますわ、



137, (7)

137, (2)

6号

女中出て行く。

(野田) 何だい貴様、貴様の方が勝ったんだから此處へ呼んだっていいぢやないか、

(濱村) いや、いけないんだよ彼奴に會つちやあ、……僕お彼奴に喧嘩を吹つかける積りなんだ、

(野田) どうぞ子譯で、

(濱村) さうでもしなけりや、うるさくつて仕様がないんだ、もう彼奴にやあ僕お飽き飽きしちやつたんだ

(山口) 尤も何だな、かう目的か外れ ~~ち~~ まつ

ちや呼んだところで仕様がないな、ますます此奴の器量を上げるばかりだからな。ああ、どうも少しがツカリしたよ、

(野田) あははは、



138

(濱村) (二人の顔を不思議さうに見廻す) 何だ

い、何か計略でもあったのかい、

(山口) 計略と云ふほどでもないかね、貴様の

顔へインキを塗り、春代に見せてやうと

云ふ譯だつたのさ、

(濱村) こいつ、怪しからん！

(野田) あははは、

(山口) だかまあいいさ、藤沼に塗りやあ目的

の一半は達した譯さ、始終彼奴に

通しな<sup>どほ</sup>んだから、……  
は<sup>は</sup>アテられ



139  
~~139~~

6号

6号

藤沼と光子、縁側へ戻って来る。

(光子の聲) (泣きさうな調子で) 困るわほんと  
うに、どうした<sup>出し</sup>たって落ちやしないわ、……

障子をあげて兩人<sup>りやうじん</sup>這入<sup>はいり</sup>って来る、藤沼は  
まだタオルを顔へあててゐる。

(野田) どうした、落ちたか、

(藤沼) (障子の所に突<sup>つ</sup>立<sup>た</sup>ったまま) 駄目だよ  
落ちないよ、

(光子) シヤボンでゴシゴシ<sup>こすり</sup>擦<sup>こす</sup>ったけれど、い  
くら洗つても落ちないんですの。随分ひどい



140

わ、濱<sup>村</sup>さんは、——覚えてらっしゃい、

(濱村) だって、僕を計略にかけようとするから悪いんですよ、ちやんと山口に聞いちやい  
ましたよ、

(光子) (山口を睨んで) 全体山口さんが悪いんだわ。自分が最初にさおしといて、<sup>すず</sup>涼しい顔をするなんて、だからあなたは<sup>ふたまたぶし</sup>二股武士だわ。

(山口) 驚いたなどうも、とんだ<sup>ふたまたぶし</sup>二股武士で天下受けちやったな。僕あ昔から<sup>ふたまたぶし</sup>二股武士で天下



141

に通つてゐるんだから、そいつあ仕方があり  
ませんよ、……、……、(藤沼に)おい、まあタオル  
を取つて見ろよ、それでもいくらか落ちた  
だらう、

(光子)でも、笑つちやあいやよ、

(山口)ええ、笑ひませんよ、

(光子)きつと、

(山口)きつと、

(光子) ~~藤沼~~ (藤沼の手からタオルを受け取る) ほら、  
こんなよ、――



142

65

鼻を中心にして藤沼の顔全体へ、ひしや  
ツと何かを叩きつけたやうに大きな緑の  
黒点<sup>こく</sup>がひろがってゐる。

(野田) あッははは、

(濱村) あッははは、

(山口) (一番仰山に腹を抱<sup>か</sup>へて轉<sup>ころ</sup>げて笑ふ) あッ

はははは、

(光子) (いつの間にか以前の冷静な態度<sup>に</sup>復<sup>かへ</sup>た)

り、二三尺離れて藤沼の顔をしげしげと見な  
から) まあ、笑ひどとぢやあないわ、



143

6号

(藤沼) (仕方なくニヤニヤしながら) おい、そ

んなにおかしいか、

(光子) おかしいわ、ほんとに、  
当分散歩にも

出られやしないわ、

(野田、濱村、山口) あっははは、

女中が襖を明ける、同時に藤沼はピョン

と跳び上がるやうな恰好をして女中の方へ

背中を向ける。それが滑稽だったので更に

三人が笑ひ轉ける。

(野田、濱村、山口) あっははは、



144

(やつぱり背中を向けたまま)

(女中) (何の意味やら分らずにキヨロキヨロし  
なから) ではあの、藤沼さんの奥さんにでも  
ちよつとお目に懸りたいッて、さう云つて居  
らつしやいますか、  
(藤沼) → 何だい、春代が来たのかい、いかんよ  
いかんよ、通しちやあならんよ、  
(野田、濱村、山口) あッははは、  
(女中) <sup>よて</sup>でも、玄関~~で~~でいいからッて仰つしや  
るんですの、  
(光子) ぢやあね、唯今お湯<sup>ゆ</sup>へ這入つて居りま



145

6号

すから、<sup>直きに</sup>~~ま~~お目にかかりますッて云つてね

何處か玄關に待たしといて頂戴。ほんとに此

處へ通しちやあ駄目よ、

(野田、濱村、山口) あッははは、

(女中) はあ、

女中出て行く。

(藤沼) (ほつとした様子で) <sup>正面へ</sup>向き直る) ああ、安

心した、此處へ来られちやあ往生だ <sup>からかい</sup>

(野田、濱村、山口) あッははは、

(光子) (鏡台の前へ来て顔を直しながら) 大丈



146

夫よ、あたしが巧く追つ拂つて上げるわ、

(濱村) 奥さん、僕はもう帰ったことにしてあるんですから、その積りでね、

(光子) ええ、いいわ、恨まれるかも知れないけれど、………

(濱村) なあに、横あもんですか、どうせ怒っ

てみるでせうけれど、怒らした方がいゝん

ですよ、僕あ今日中に此處の宿屋へ逃げて来

ますよ、

(光子) (鏡台の前で、お白粉のバツプを持ちな



147 別行

6号

から藤沼を手招きする) あなた、ちよいと此  
處へ入らっしゃいよ、

(藤沼) うん、

光子の前にすわり、顔をつき出す。

(光子) (ハツプで斑点の上をたいてやりなが

ら) まあ、ほんとうに仕様がないわ、かうで

もしてごまかして置かなけりやあ、……

(藤沼) どうだい、いくらかよくなりさうかい、

(山口) (皮肉な口調で) 生れつき色が白い

んだから、一面に白く



148 6号  
6号

塗つちやつたら却つて分らなくなるかも知れ  
んな、

(光子) ~~ハツ~~ (ハツ) を置いて さあ、いいわ、

皆さんに見てお貰ひなさい、

(山口) どれどれ、見せ給へ、

(藤沼) いいかい、此れで、

藤沼向き直る、前より ~~お~~ おかしな顔に  
なつてゐる。  
(一錠と

(野田、濱村、山口) あッははは、

三人 ~~一~~ 層ひびく笑ふ。藤沼自身もニヤニ



149

6号

やする。光子、口もとに微笑を食んで、横  
眼で夕口夕口藤沼の面つきを眺めてゐる。

幕



150 16号

16号

(藤沼)

どれ、ちよつと鏡を見せろよ、

光子、黙つて鏡を度す。

(藤沼)

(鏡を見る) 成る程、こりやあとてもひ

といや、

(野田、

濱村、山口) あつははは、

(藤沼)

あつははは、

四人の男一緒になつて笑ふ。光子、口も  
とに微笑を含んで、横眼でダロダロ藤沼の  
面つきを眺めてゐる。

幕